

マンスリー・サンズ・トーク(74)

2015.1.1

木村 謹

あけましておめでとうございます

本年も、サンズ・トークをよろしくお願ひいたします。さて、今回は、小石川後樂園を訪ね、水戸黄門、すなわち徳川光圀の実像に触れました。

ドラマでは、水戸黄門は助さん、角さんを連れて全国を行脚し、勧善懲悪の活躍をするが、光圀の性格や事跡は、それとは全く異なるものであった。

小石川後樂園は、もと水戸藩中屋敷の庭園

小石川後樂園は、東京ドームの西側にあつて、江戸時代、水戸藩中屋敷の庭園だつた。寛永年間、初代藩主が造園に着手、2代目の徳川光圀が明の遺臣、朱舜水の意見をいれ、中国の故事に習ひ、儒教趣味の築山庭園に仕上げたのである。



庭園の雪吊り

彼が29才のとき、明暦の大火により藩邸が焼失、貴重な歴史書などを失ひ、これを機に藩に史局を設けて日本史の修史事業を始めた。その4年後の寛文元年(1661)、2代藩主となつて、数十名の学者を募つて修史の編纂に力を注いだ。在位中、そして72才で死去するまで「大日本史」の編纂を続け、死後50年ののち、ようやく完成したとされる。この史書により日本古来の伝統を学び、身を処してゆくのが後年、水戸学といわれ、幕藩体制や武士の精神的支柱となつたのである。光圀は、中国の史書を学び、

大日本史の編纂を手がけて、徳川の政治^{まつりごと}のあるべき姿について責任ある基準を追求しようとした、優れた政治家で、学究肌の思索の人だつた。

幕末前後の水戸学

安政5年(1858)、水戸藩の9代藩主徳川斉昭は、大老井伊直弼と条約問題や将軍後嗣問題で衝突して失脚した。それから安政の大獄が始まり、勅許なきままアメリカとの通商条約の締結がなされた。桜田門外の変で井伊大老が暗殺され、大政奉還から明治維新へと時代はめまぐるしく動いた。こんな中で、吉田松陰や西郷隆盛も水戸学の影響をうけたといわれる。この前後、世は勤王に振れ、攘夷に傾き、大波乱の時代であつた。徳川最後の将軍といわれる徳川慶喜は、水戸藩主徳川斉昭の子息であり、水戸学の尊皇思想を体現して朝廷への恭順による大政奉還が成つたのであつた。

そして、幕府の終焉から明治維新までの世の流れの中で、水戸学というものは、幕府親藩はもとより、薩長土肥、朝廷公家の間でも行動のよりどころの一つとして意識されたのであつた。日本の近代国家としての自立が立派に進んだのも、光圀の水戸史観があつたからこそその結果と私は今、思つている。



園庭にある丸屋というあずまや

藤田東湖遭難の碑

9代藩主の斉昭の懐刀、藤田東湖は、他藩の武家にも水戸学の指南をした学者だつた。しかし、藩邸で安政大地震(1855)に遭遇し、母を救けんとして横死された。地震以後の水戸藩は東湖らを失つて、時局対応に多大の齟齬を来たしたとされる。その「護母致命の碑」が、今も園の一隅に見られるのだつた。